

## 昭和史の体現

店村新次先生を偲ぶ

吉川 浩

年初に店村さんから電話があった。

「来年度、研究日の予定はどうなってますか？」

「火・木・金になりそうですが……………」

「それじゃそのうちの一日、何曜でもいいから彦根へ来て下さい。」

店村さんは昔から、無類の仕事好きだったが、他人に仕事をさせるのも実に上手だった。用件は後回しにして、先に余裕日を言わせてしまうあたり、相変らずうまいものだと言っていると、

「私ももっと頑張れるつもりでいたが、去年あたりからどうも体調が良くない。助けて下さい。」

滅多に弱音を吐かない店村さんが珍しく心細いことを言う。

「手術のあと、テニスも復活されたと聞いて喜んでいましたが……………」

「いや、この頃はそれどころではなくなった。肺活量も半分くらいに減ってしまって、長時間教室で声を出すのがつらい。」

そう言えば、先程から店村さんの電話の声に張りが無いのがずっと気になっていた。

「お手伝いしますから元気を出して下さい。」

「うん、例年、寒い時は調子が悪いが、暖かくなると良くなる。今度もそうなれると思うが……………」

二月から三月にかけて、曜日の確定や、クラス担当、テキストの選定など数回電話のやりとりがあった。昔と同様、店村さんの説明は要領がいいし、話の進め方もてきぱきしている。が、声の弱々しいのはどうも気がかりであった。「暖かくなれば……………」 「桜の咲く頃には……………」これが電話のたびに繰返す合言葉になった。

「四月の初め、授業の始る前に一度聖泉へ来て下さい。皆さんに紹介するし、教室や設備も見ておいてほしいから。」

こんな打合せをしていた頃、聖泉から入学式の案内状をいただいた。四月五日一緒に出席しようと約束し、当日、京都駅のどこで何時に落ち合うか、前日までに店村さんから電話をくれることになっていた。

四月になっても心待ちの電話がない。たまりかねてこちらから電話を入れた。奥様が出てこれ、

「風邪をひいたのか、数日前から体調を崩しています。全身に痛みがあるようなので、近いうちに入院させます。」

「五日の入学式にご一緒できると楽しみにしていましたのに……」

と絶句すると、

「主人も五日には約束があるから外出させてほしい。新幹線で米原まで行けば楽だからと医者に頼んだのですが、無理だと叱られました。」

こういうお返事だった。

「怖れていたことが起りつつあるのか？」そんな気持ちに陥らざるを得なかった。聖泉で第一回の授業を終え、個室に移られたと聞いて、病院にかけつけた。部屋をノックすると、先生の妹さんが出てこられた。四・五年前手術を受けられた時にも看病されていたから面識がある。

「痛み止めに昨晚飲んだ薬が効きすぎているのか、昏睡状態が続いています。見舞っていただいても気づきますかどうか。」

店村さんは点滴のほか酸素マスクも身に付けていた。あまりの痛々しさに息を飲んでみると、思いのほかしっかりと眼を見開いてくれた。

「一人で聖泉へ行ってきましたよ。」と言うと、酸素マスク越しに

「すまん、すまん、有難う、有難う。」と繰り返うなずいてくれた。

かすかに手を挙げる仕草をするので、花を受取ろうとしているのかと差し出すと、違った。握手してくれというのであった。店村さんとは何十年のつき合いだが、お互い照れ屋の日本人同士、手を握ったりするのは初めてだ。こんなに喜んでくれて、と涙が出そうになった。聖泉の初

印象や職員、非常勤仲間の先生方が皆親切にして下さった話をすると、「うん、うん」と嬉しそうに答え、酸素マスクを外してしまった。

十数分も手を握っていたのだろうか、温かい、柔らかい感触が今もある。別れを告げ、外に出てドアを閉めようとするときまだ何か言いたそうにしている。引返して耳を近づけると、「あんたは若いね、元気ね、いいね。」と聞こえた。一瞬、何と答えるべきか、とまどったが、

「先生、これからもっともっと暖かくなります。夏休みくらいまでは休んで良いから、しっかり療養して、後期から一緒に出校しましょう。」

と言ったような気がする。以後、何回かお見舞いの度に、「後期には……」、「夏休みのあとは……」というのが合言葉になったが、後期を待たず、夏の終り、不帰の客となられた。

日本人の平均寿命は世界一長くなり、人生八十年時代が到来したという。だが、私の周囲からは急ぎ旅立つ人が何と多いことか！ また一人、私の前を歩いていた人の足音が消えてしまった。あれから数ヶ月、折しもわが国では新しい総理が決ろうとしている。テレビ・ニュースを見ながら、その宮澤喜一氏と店村さんは同い年なのに気がついた。これから新しい、大きな仕事にとりかかる人と、まだまだやりたかった仕事を残さねばならなかった人と。聖泉短大に来て、今は無人の店村研究室の前を通る時、無類の仕事好きだった先生の心残りを想い、痛惜の気持ちが込み上げてくる。

店村新次先生は1919（大正8）年、旧満州（現中国東北部）、奉天（瀋陽）のお生れである。御父君は満鉄社員であった。六人兄妹だったが、長兄を残して次々夭逝され、先生も妹さんも躰が弱かったため、幼い二人の命を救うため、定年を待たず、暖かい内地に引揚げられたと聞いている。以後新次少年は敦賀、呉、大連、京都で小・中学校の課程を終え、1937（昭和12）年、東京外国語学校（現東京外国語大学）仏語部本科に入学する。卒業して結婚されたのは1941（昭和16）年だが、これは太平

洋戦争勃発の年だ。今年はその五十周年に当る。

卒業と同時に大日本航空株式会社（現日航）に入社されたが、最初の赴任地はヴェトナムのダナンだった。1943（昭和18）年には大日本航空・中華航空南方駐在社員の身分のまま、日本軍の南方航空輸送部に編入され、南方軍軍属となり、シンガポール本部に勤務、終戦を迎えられた。軍属であったため、敗戦後、日本軍兵士とともに聯合軍捕虜となり、南海の無人島レンパンで六ヶ月間抑留生活を強いられた。飢餓にも瀕する耐乏の日々であったという。1946（昭和21）年5月、捕虜輸送船でやっと祖国に引揚げられた。

苦しかったに違いないこの時期のことを先生はあまり口にされなかった。よく話されたのはそれ以後のことだ。次のエピソードは忘れ難い。

奥様は先生より先に帰国され、御次男を出産されていた。「長いこと経って帰ってきたら、子供が増えとるんや。けれども長男と違くて、この子は生れる前後も知らんし、わしの居らん間に勝手に大きくなつとるんや。いきなり、これお前の子、いわれても変な工合やった。いつか銭湯へ連れて行ってね。子供は湯舟で遊んどるし、わしは洗い場でゴシゴシ躰を洗うとった。何げなく後の湯舟を振り返ったら子供が居らんのや。何処行きよったか、思うてだいぶ長いことキョロキョロしてたら、湯舟の底に何やら肉色の塊が沈んどるんや。ひやーッ、えらいことやった！思うて引き上げたらグツタリしとるねん。きつう抱いて背中たたいたら、わあっーと泣き出しよった。それからや、これほんまにわしの子や思えるようになったんは。」

戦争でほとんど全てを失ったけれど、学問研究の自由だけは未だかつてない程たっぷり与えられた祖国日本へ帰ってきて、店村さんは卒業と同時に断ち切られてしまった文学と学問への情熱を燃え上がらせた。1947（昭和22）年、母校京都府立第三中学校をふり出しに、長い教師生活が始る。旧制三中（現山城高校）では英語と音楽を担当された。かなり自由で、型にはまらない、楽しい授業だったらしい。時には英語から脱

線して、音楽やフランス文学の話に熱中されたそう。課外には特別意欲的な生徒を集めてフランス語を教えられた。筆者の同僚の一人は三中時代の先生の教え子だが、店村先生に刺激され、京大法学部の入試をフランス語で突破したという。

1950（昭和25）年には天理大学助教授に迎えられ、念願のフランス語、フランス文学の研究と教授に専念されることになった。1953（昭和28）年に同志社大学に移られ商学部配属された。私が初めて店村先生にお会いしたのは、それから間もなく1955（昭和30）年春であった。こちらは駆出しの非常勤講師だったが、先生は職歴も教歴も豊富な颯爽たる青年助教授だった。

ヴェトナムのハノイだったか、サイゴンだったか、フランス人の店で仕立てた真っ白の夏服を着て、弘風館二階の研究室に坐っていた若き日の店村さんの姿が懐かしく、鮮烈に蘇る。色浅黒く彫りが深い顔立ちの先輩を、非常勤仲間のI先生は“インドの貴公子”などと呼んでからかっていた。研究室とはいえ、それは鉄筋ビルでも個室でもない。木造二階建ての旧館、戦前の教室をそっくりそのまま転用した代物<sup>しろもの</sup>だった。隣の部屋にはドイツ語の先生が五人入っていたが、こちらにはフランス語、スペイン語、中国語、ロシア語と、国際色豊かに七・八人の先生が雑居していた。二つずつ向い合せに八脚の机が散在し、部屋の片隅には長い平机が二つ並べられ、五・六脚の椅子が取り囲んでいた。そこがわれわれ非常勤の使う場所だった。戦後まだ十年足らず、日本もわれわれの大学もまだ貧しかったのだ。

初めて出向いた日、店村さんは教室名残りの黒板を使ってフランス語の言葉遊びを披露していた。同居する先生たちの姓名を発音の似たフランス語に置き換える遊びであった。当時、関西日仏学館教授のHauchecorne（オーシュコルヌ）氏は日本名を“桜洲孤留”と名乗っていたが、店村さんはその逆を試みていたのだ。センスも機知もなかなかで皆を爆笑させた。中に、後年、サラリーマン税金訴訟で有名になる

スペイン語の大島正さんの姿もあった。彼は東京外語の同窓で店村さんの親友だった。

オーディオ機器はいわずもがな、書棚も<sup>ついたて</sup>衡立もない、歩けば埃の舞う猥雑な留り場としか言いようのない研究室だったが、そこには奇妙な明るさと活気が漂っていた。戦争の脅威に怯えることなく、平和に、自由に、みんな思う存分、好きなことができる、そんな喜びに満ちていた。店村さんの戦争体験はすでに触れたが、当時はまだ誰も戦争の傷痕を残していた。フランス語の最年長はM先生だったが、外交官出身で太平洋戦争の末期、中立国スイスのジュネーヴ総領事だった。わが国のポツダム宣言受諾の文書を文字通り手ずから連合国側に手交されたという。「祖国の歴史的な大転換に立ち会ったのですよ」というのが先生の述懐だった。

若手のI先生はなかなかのユーモリストだったが、ひどい痔疾のため、徴兵検査当日は入院中だった。診断書を添付し、欠席届を出してあったが、憲兵がわざわざ病院まで調査に来たという。「かの恐るべき大日本帝国憲兵にケツをまくったのはこの俺くらいのもんだろう」というのが先生の自慢だった。中国語のO先生は中国大陸で足を負傷されていたし、フランス語のT先生は勤務先の出版社が空襲で全焼し失職、同じく情報局翻訳官だったK先生は仕事がなくなり、田舎に引き籠って農業をされていた。

このような先生たちに非常勤講師も<sup>ま</sup>交じり、月に一・二度この部屋で勉強会や輪読会が行われた。リーダーは店村先生だった。その頃先生は十九世紀ロマン派の詩人、ヴィクトル・ユゴーを専攻されていたが、席上ユゴーの詩を朗読されたり、ユゴーが詩に用いた膨大な語彙について分析したり、ユゴーの神秘主義的傾向やオキュルティズム愛好癖について紹介されたり、たびたび研究発表を行なった。

これらの勉強は研究論文にまとめられ、大学の紀要に発表されていた。ユゴー関係の主要論文を列挙すれば、

- 1952 (昭和27) 年 「ユゴーと叙事詩(1)」 天理大学学報第8輯
- 1956 (昭和31) 年 「ヴィクトル・ユゴーとスピリティズム」  
同志社人文学21号
- 1957 (昭和32) 年 「ユゴー詩篇に見る対句的表現の研究(1)」  
同志社人文学31号
- 1960 (昭和35) 年 「ユゴー詩篇に見る対句的表現の研究(2)——  
Auguste Rochette のエスプリ論における誤謬・  
その他」 同志社人文学49号別冊
- 1961 (昭和36) 年 「ユゴー詩編『クロード・グー』について——  
作中人物とそのモデル」 同志社人文学54号
- 1962 (昭和37) 年 「ユゴーにおける法外者——『クロード・グー』  
の意義」 同志社人文学58号
- 1962 (昭和37) 年 「ユゴー詩編に見る対句的表現の研究(3)」  
同志社人文学63号
- 1963 (昭和38) 年 「ユゴーの叙事詩編『眠れるボアズ』研究」  
同志社人文学65号

この頃の学外活動としては次の二つを挙げておきたい。戦後再発足した日本フランス文学会は、昭和三十年頃、事業活動の一環として『フランス語学文庫シリーズ』を企画した。店村先生も共同執筆者の一人としてそれに参加し、足繁く京都大学伊吹武彦先生の研究室に出向いていた。その成果は1957(昭和32)年、伊吹武彦編『フランス語学文庫・訳読編』として結実している。

いま一つはシャンソンを歌う店村さんだ。先生は旧制京都三中で音楽を担当していたほど、音楽の素養があり、なかなかの美声の持主だった。晩年は照れくさくなったのか滅多に歌われなくなったが、若き日の店村さんは教室でシャンソンを歌ったし、校庭でもしょっちゅう口ずさんでいた。こういう店村さんに京大の伊吹先生が目をつけた。当時、伊吹先生はさる民間放送で語学番組を担当していた。「歌うフランス語講座」、

そんな題名ではなかったか？店村さんはこれに数回出演されている。どこかに録音が残っていないだろうか？まだテープ・レコーダーが普及する以前のことだから無理だろう。

昭和三十年代前半、店村先生の教育研究活動は学内外にわたって積極的に展開されていたが、内面には大きな悩みと迷いを抱えておられたように思う。このままヴィクトル・ユゴーの研究を続けるべきか、他に研究分野を広げるべきか、三十年代後半は先生にとって模索の時代である。この頃、先生は誰かに「あなたの研究対象は何ですか？」と訊かれると、「一応、ヴィクトル・ユゴーなんですが……」と口ごもって答えられるようになっていた。また、われわれにも「たしかにユゴーの詩は豪華絢爛で美しいけれども、この頃、どこか遠くで太鼓が鳴りひびいているような、遠雷を聞いているような気がする。」ともどかしさと違和感を洩らされる時があった。言うまでもなく、ヴィクトル・ユゴーは十九世紀ロマン派最大の詩人で、旧来の古典主義的作詩法を変革し、近代詩の門を大きく開いた人だ。小説や劇作、政治思想、社会問題の分野にも巨大な足跡を残している。研究対象として不足はない筈であった。

しかし、まことに当然のことながら、彼は十九世紀の人、そこには現代の、戦後の、二十世紀の息吹きは無い。深刻な戦争体験を経た店村さんには、これがどうしようもない違和感、もどかしさとしてつきまとっていたように思う。模索する店村さんに転機をもたらしたのは初めてのフランス留学である。1963（昭和38）年、店村さんはフランス政府招待、日本フランス文学会派遣、第一回 stagiaire（現地研修生）として渡仏する。

OLや学生まで気軽にヨーロッパ旅行に出かける今とは時代が違う。店村さんの世代は最も手きびしく戦争の惨禍を被ったと言っていい。戦死者の数においても、個人々々の体験の深刻さにおいても。戦争が終わった時、店村さんは二十六歳。十八歳でフランス語を学び始め、日仏両国



の植民地であったヴェトナムでフランス語通訳として勤務し、戦前から流暢にフランス語を話したこの人に初めてフランス留学の機会が与えられたのは四十四歳の時であった。

その頃、店村さんと私、先述の I 先生、龍谷大学の K 先生の四人は関西日仏学館副館長の Héman (エマン) 氏に加わってもらい、フランス語の初級文法読本を作製中であった。留学の決った店村さんはエマン氏からパリの最新情報を仕入れるのに余念がなかったが、「私の乗った飛行機がパリ上空にさしかかり、眼下に街が見えた時、私は必ずや涙を流すであろう。」こんな意味のフランス語でエマンさんに話しかけていた。いささかオーヴァーだな、と笑いながら、われわれも次は自分の番だと思って聞いていた。皆、留学は未だだった。

“喜び勇んで” という形容が誇張でも滑稽でもないほど、張り切って、店村さんは出発した。昭和38年8月半ばだったろうか？夏休みの最中だった。昭和30年代には、まだ戦前の“古き日本”がそのまま多分に残っていた。近頃数多く出版される昭和史の記録や写真集を見ながらそう思う。復刻された岩波写真文庫『新風土記』1954～1958など特にその感を深くさせる。店村さんの出発風景も明治大正の“洋行”と大差はなかった。

奥様は東京まで同道されたし、御長男を先頭に、家族は勿論、われわれ同僚も学生も大挙して見送りに行った。京都駅一番ホーム、上り東京行夜行列車の二等寝台に乗り込む店村さんの後ろ姿。教え子から貰った花束を抱え、デッキで晴れがましく手を振る店村さん御夫妻。水虫のせいでサンダル<sup>はだし</sup>裸足のまま駆け付け、バタバタと扇子を使って談笑するスペイン語の大島さん。ホームの赤黒い裸電球に照らされた夏の夜の光景が走馬灯のように浮び上る。東海道新幹線が開通する一年前のことである。

店村さんの後<sup>あと</sup>を受け、聖泉短大に出講する日、私はこの一番ホームを

通過する。時間にゆとりがあれば、ホームの片隅に設<sup>しつ</sup>えられたキオスクのスタンドに立寄り、コーヒーを飲み、サンドイッチをつまむ。行き交う旅客や入っては出て行く列車を眺めるのは楽しい。三十年前の夏の夜、店村さんはここから旅立って行ったのだった。いつも前かがみに、時にはつんのめるように急ぎ足に人生を歩み続けた店村さんもここを通る時にはあの出発風景を懐かしく思い出しておられたのではないか。(あとで聞いたが、店村さん御自身、「バンザイ、バンザイの歓呼の聲に送られて出発した」と笑っておられたそうである。)

留学を契機に店村先生の研究対象はロジェ・マルタン・デュ・ガールへ絞られていった。以前、先生はこの作家に対する強い関心と親近感をわれわれに洩らされることがあったが、戦後のわが国における反戦平和運動の高揚と相まって、この作家を語ることが一種ブームの状況にあり、時流に乗るのを潔しとされなかったのだ。また、『チボ一家の人々』をはじめ彼の主作品がすでに山内義雄氏や青柳瑞穂氏など諸先輩によって翻訳済みであり、今更自分が参入しなくても、というお気持ちであったらしい。「マルタン・デュ・ガールもいいけれど、もう“いいとこ取り”されてるしなあ、<sup>あと</sup>後に続いても落穂拾いになりはせんか……」、こんなことを言っておられたように思う。1952(昭和27)年に完了した山内義雄氏の『チボ一家の人々』の翻訳は名訳として定評があり、芸術院賞を受けていた。

留学中、現地でフランス人研究者と意見や情報を交換し、パリ国立図書館へ出向き、そこには彼の遺稿をはじめ、未公開、未渉猟の文献が数多く存在し、まだ未開拓の分野が残されていることを確認され、これならやり甲斐がある、と判断されたらしい。

帰国後、先生は「これからはマルタン・デュ・ガール一本に絞る」とか、「ライフ・ワークとしてマルタン・デュ・ガールをやる」と周辺のわれわれに明言されるようになった。

周知のように Roger Martin du Gard (1881-1958) は1937年度ノーベル文学賞受賞の大河小説《Les Thibault》『チボー家の人々』でつとに著名である。“大河小説”は激動する時代の叙事詩であり、現代社会の巨大壁画を描く“円環小説”だが、この作品ほど綿密に、的確に、二十世紀初頭から第一次世界大戦へと向う奔流のような歴史の流れを躍動的に描き切った小説はほかにない。作者の分身と思えるチボー家の二人の兄弟——知的で冷静な医師アントワーヌと情熱的な反戦運動家ジャック——の生き方を人間味豊かに描きながら、作者は個人の希望や善意や努力が無残にも戦争に押し流され、踏みつぶされて行く時代の宿命を客観的に見据えている。この作品は店村さん自らの戦争体験と時代認識にぴったり合ったのである。以後、店村さんはこの作家とこの作品に自分の後半生を捧げたと言っていいほど傾倒した。

帰国後一年経った1966（昭和41）年早々に「ロジェ・マルタン・デュ・ガールの処女作品《Devenir!》について」（同志社人文学84号）を書いたのを手初めに、ほぼ毎年一作ずつの割合でマルタン・デュ・ガール研究論文を精力的に発表する。

1968（昭和43）年 「マルタン・デュ・ガール——人と作品（とくに『生成』について）」（訳書『生成』法律文化社版のなかに）

1970（昭和45）年 「マルタン・デュ・ガールの作品について」（訳書『文学的回想』法律文化社版のなかに）

1970（昭和45）年 「ロジェ・マルタン・デュ・ガールの作品系列に関する一試論」 同志社人文学116号

1973（昭和48）年 「ロジェ・マルタン・デュ・ガールの作品に見るふたりのユダヤ女性」 同志社外国文学研究5号

1974（昭和49）年 「書簡と日記に見る1930年代における『チボー家の人びと』の作者」 同志社社会科学17号

1974（昭和49）年 「マルタン・デュ・ガール家の家系」 同志社外

## 国文学研究12号

1976 (昭和51) 年 「『ノワズモン・レ・ヴィエルジュ』 試論」 同志社外国文学研究14号

1977 (昭和52) 年 「『我らのうちの一人の女』 翻訳後記」 同志社外国文学研究16号

1980 (昭和55) 年 「ロジェ・マルタン・デュ・ガール遺稿『Deux jours de vacances』について」 同志社外国文学研究27号

1981 (昭和56) 年 「ロジェ・マルタン・デュ・ガール『一般書簡集 I』より——一つの照査のための分析研究」 同志社外国文学研究30号

1982 (昭和57) 年 「ロジェ・マルタン・デュ・ガール『一般書簡集 II』より——一つの照査のための分析研究」 同志社外国文学研究32号

1982 (昭和57) 年 「Deux jours de vacances 再見」 同志社外国文学研究34号

これらの諸研究は静かな環境から生み出されたのではない。留学を終え、帰国した店村さんを待ち受けていたのは学園紛争の嵐であった。東大の安田講堂占拠事件（昭和43～44年）に象徴される破壊と荒廃、混迷と混乱に全国どこの大学もさらされていた。われわれの同志社大学も数度にわたって学園が封鎖され、研究室に入ることもかなわなかった。店村さんも何度か、研究室の貴重な資料や文献を持ち出したりした筈である。

しかも、この時期、店村さんは四十代の後半から五十代前半の働き盛りに当たっていたから、学部や研究室の役職を幾つかこなさねばならなかった。商学部の学生主任や第二外国語研究室の科目代表という要職を押しつけられ、時には、過激派学生との徹夜団交に立ち合ったり、大学改革を討議する検討会を主宰したりしなければならなかった。まさしく激

務に耐えながらの研究生活であった。

学内が封鎖された時、われわれは学外のプレハブ研究室に避難して、大学は如何に改革されるべきか、学生の求めるカリキュラム改革に如何に答えるべきか、店村さんを中心に真剣に論じ合った。改革の焦点はマンモス大学におけるマスプロ教育の打破であった。あれから四半世紀、今年初めて聖泉短大へ出講して、この大学にはあの時の理念や理想が生かされているのを感じている。新入生十数人毎の小人数を対象とする基礎演習クラスの設置や小人数の語学教育、学生の個性や適性を見極めた就職指導など、マンモス大学では望むべくもなかった肌理こまかい学生指導がここにはある。この大学の草創にかかわった一人として理念実現のため店村さんも努力されたのではなかろうか。

熾烈な学生運動もようやく沈静化し、学内に秩序と静けさが戻ってきた昭和五十年代に入ると店村先生の研究は一層熱を帯び、拍車がかかった。まるで会社勤めのサラリーマンのように、店村さんは朝九時前に弘風館五階に着き、夕方、六時頃帰って行った。終日、研究室に立て籠もり、文字通り寸暇を惜しんで研究に翻訳に没頭した。当時フランス語の教務をしていた私に、「君、来年、一時間目と五時間目の授業、全部わしが持ってもいいよ」と言われた。一瞬とまどったが、ようやく意味が分った。間の五・六時間、何ものにも邪魔されず、心おきなく勉強に専念したいからなのであった。奇貨おくべし、教務としては皆のいやがる早朝と夕方の授業をどう割り振るか頭の痛い所だったから、喜んで店村さんに押しつけた。

子供さんお二人が音楽家を目指し修業中だったから、御自宅は子供さんに譲り、自分は学校の研究室をフルに利用する。店村さん御自身は、われわれにこんな風に説明されていたが、私はそれだけではないと思う。先生自身どこまで意識されていたか知らないが、傾倒し敬愛して止まぬロジェ・マルタン・デュ・ガールと同じことを為さったのである。この頃から店村さんの研究室の壁面にはマルタン・デュ・ガールの肖像画が

高々と掲げられ、仕事にふける店村さんを見下していた。ジッドやプルーストやロマン・ロランなど、同時代の大家と比べてマルタン・デュ・ガールほど奇矯な性癖や派手な事件や面白い逸話に乏しい人はない。彼は1920年頃『チポ一家の人々』の構想を練り始めるや、パリ郊外オワズ県クレルモンに家を買ひ、全ての資料や記録や文献をここに運び、月曜朝到着して執筆、土曜朝パリの妻のもとに帰るといふ几帳面で単調な生活を実行し、八部十一巻より成る大河小説を完成させる。

単身赴任に赴くサラリーマンのようにと言うべきか、それとも山に分け入る隠者、あるいは僧院に寵る修業僧のようにと言うべきか。この頃、店村先生にも大きな目標が樹っていた。それは、来るべき1981年、パリで開催される筈のロジェ・マルタン・デュ・ガール生誕百年記念国際学会に出席し、研究発表を行うことと、それに合せて、主著『ロジェ・マルタン・デュ・ガール研究』を完成させる、この二つであった。

目標に向け、店村さんは生活の全てを整えた。若い頃の店村さんは、酒豪であった。親友の大島正さん等と連れ立ってあちこちの酒場に出入っていた。ところが昭和五十年頃を境に、悪友がいくら誘っても滅多にご一緒されなくなった。忘年会や懇親会のあとも必ず一次会だけでさつと帰ってしまった。“からみ酒”だから遠慮するということだったが、それは口実にすぎない。研究生活のコンディションを整えるためであった。お酒が嫌いになられたのでも決してない。「晩酌は？」と尋ねると、「ビール一本は欲しい。あれがないと砂を噛むようだ。」という返事だった。しかし、それ以上は絶対に控えられた。大した意志力である。ライフ・ワークを完成させるために、という一点に生活の全てが集中し、抑制されていた。

この間、店村さんは五回にわたって渡仏している。いずれも、夏休や春休を使っての慌しい短期滞在だが、現地の研究状況を調べ、研究者と意見を交換し、マルタン・デュ・ガールの遺稿が寄贈されているパリ国立図書館で文献や資料を調査し、時には作家の出自と家系を調べるため

フランス各地を旅行した。

一方、国内では、店村さん初訳のマルタン・デュ・ガール関係の翻訳が続々出版された。

1968 (昭和43) 年 ロジェ・マルタン・デュ・ガール「生成」 法律文化社

1970 (昭和45) 年 ロジェ・マルタン・デュ・ガール「文学的回想」 法律文化社

1973 (昭和48) 年 C・レーマン「フランス文学におけるユダヤ的要素」 (1)・(2)・(3)・(4) 同志社外国文学研究 5・6・9・15号

1973 (昭和48) 年 ロジェ・マルタン・デュ・ガール「老いたるフランス」三修社

1974 (昭和49) 年 グリックスバーグ『二〇世紀文学における悲劇的世界像』法律文化社

1975 (昭和50) 年 ロジェ・マルタン・デュ・ガール「寡黙の人」(1)(2)(3) 同志社外国文学研究10・11・12号

1976 (昭和51) 年 ロジェ・マルタン・デュ・ガール「ノワズモン・レ・ヴィエルジュ」 同志社外国文学研究14号

1976 (昭和51) 年 マルタン・デュ・ガール「生成」改訳 講談社

1977 (昭和52) 年 ロジェ・マルタン・デュ・ガール『我らのうちの一人の女』 同志社外国文学研究16号

1977 (昭和52) 年 ロジェ・マルタン・デュ・ガール「対話」 同志社外国文学研究17号

待望久しかったロジェ・マルタン・デュ・ガール生誕百年記念国際学会は1981 (昭和56) 年11月13日と14日の両日、La Société d'Histoire Littéraire de la France (フランス文学史学会) 主催、La Bibliothèque Nationale (国立図書館) 等協賛のもと、パリ国立図書館委員会会場で開催された。トゥルーズ大学のシカール氏、パリ大学のガルギロ氏、ニ

ース大学のダスプル氏等、フランス第一線の研究家に伍して店村さんは《Roger Martin Du Gard au Japon》“日本におけるロジェ・マルタン・デュ・ガール”のテーマで研究発表を行った。

講演の中で先生はまず、1938年から1956年の長きにわたった山内義雄氏の訳業について紹介された。『チボー家の人々』の前半はいち早くわが国においても翻訳され、戦前の知識人や学生、勤労者層に大きな感銘を与えたにもかかわらず、いな、それ故にこそ、軍国主義の台頭と跳梁によって、反戦的平和主義的な後半部の訳出が禁止され、敗戦を経たあとでしか訳業が再開されなかった事実、さらには、十五年戦争の開始から敗戦・戦後復興に至るこの期間、わが国が持たざるを得なかった特殊な社会構造、特異な精神状況にも触れながら、『チボー家の人々』が各時期、日本人に如何に読まれ、如何に訴えかけたか、を緻密に分析された。

さらに、反戦意識の強い『チボー家』の後半、『一九一四年夏』や『エピローグ』は原作者が第一次世界大戦という過去の教訓をもって第二次世界大戦を警告した予言的作品であるにもかかわらず、われわれ日本人はこれを第二次大戦後に回顧的にしか読み得なかったというわが国の歴史的不幸について語られた。現在、日本は経済的繁栄と防衛論の嵩まりの中にあるが、こういう時にこそ『エピローグ』でのアントワヌの懐疑思想や悲観的予言に現代的意義を認めざるを得ない、と強調された。また、ヨーロッパ各国においても、作者の予言と警告があったにもかかわらず、第二次世界大戦を防ぎ得なかった現実にふれ、マルタン・デュ・ガールはわが国のみならずどの国においても歴史の重大局面において振り返られねばならぬ作家であり、『チボー家の人々』は単なる自然主義的壁画小説を超える作品である、と結ばれた。

この講演は聴衆に深い感銘を与え、学問的評価も高かった。翌1982年、フランスの一流学術誌《Revue d'histoire littéraire de la France》(フランス文学史研究) 5～6号に要旨が収録されている。



もう一つの目標であった、主著『ロジェ・マルタン・デュ・ガール研究』の完成は予定より一年余遅れ、1983（昭和58）年1月、三修社より出版された。遅れた理由を先生は緒言で次のように述べている。

「著者として最も遺憾に堪えないのは、本書のなかに、ついに未刊の遺稿『モーモール大佐の日記 Le Journal du Capitaine Maumort』という最後の大河小説（未完）について十分に記述することを得なかったことである。この大作の遺稿は一九七七年頃からダスプル氏によって編集が始められ、一九八一年一一月の国際学会の際には、それがいよいよ一九八二年中に出版されるであろうというダスプル氏自身の予想を聞かされていた。私は私の本書出版準備中にそれに接し得るという期待を持ち、それを本書に急遽とり入れるという心構えをしていたのである。しかし最近のダスプル氏の手紙によって、それがさらに先へと延ばされることを知った。私は元来本書を、小説家生誕一〇〇年の年を目標に準備してきたのであった。これを一年遅らせたのは、『モーモール』の出現を待っていたからに他ならない。しかし私自身の第一線での職業的活動からの引退の時期が迫っている現在、私は不確定な『モーモール』の出版を待つて本書の完結をこれ以上引き延ばすことができなくなってきた。残念ながら『モーモール』については、一九七七年渡仏の際ダスプル氏との接触で得た僅かな情報を、そのまま記述するに留めるほかはなかったのである。」

未完の大作『モーモール大佐の日記』は、著者の遺言により、膨大な日記類とともに、草稿のままパリ国立図書館の書庫に眠っていた。死後三十年は未公開ということであったが、研究調査と編集準備はつとに開始され、店村さんは早くから解禁を待ち望んでいた。1970年、パリに留学する私に、店村さんはこれがいつ公開されそうか探ってきてくれと依頼した。ガリマール書店の編集局に直接尋ねに行った日のことを思い出す。答えは、今の段階では、何の見通しも立っていない、とのことだった。

店村さんは何故これ程まで遺稿の発表を待ち続けたか？それは、この作品が第二次世界大戦を主題にしていたからである。壮年時、輜重隊軍曹として第一次世界大戦に従軍、この体験を基礎に大河小説の第一作を完成させ、第二次世界大戦を予見し警告していた著者が、年老いて第二次世界大戦を迎え、大河小説の第二作を準備していた。ここで著者は自ら警告していた第二次世界大戦についていかなる見解を述べているか、店村さんは文字通り一日千秋の思いで知りたがっていた。学校卒業と同時に、極東の植民地へ派遣され、奇しくも作家と同じ輸送隊員として自らのフランス語を国策遂行のため使用するよう強いられた青年が、平和到来のあとマルタン・デュ・ガールに傾倒し、その評伝を書き終えようとしている今、著者の年齢は第二次世界大戦時の作家のそれと同じになっていた。完璧を期すためには、『モーモール大佐の日記』の全貌を知ることがどうしても必要であった。店村さんの主著『ロジェ・マルタン・デュ・ガール研究』の末尾はやむなく画龍点睛を欠く無念と苦渋に満ちている。

それはともかく、1983（昭和58）年、三修社より刊行された『ロジェ・マルタン・デュ・ガール研究』は紛れもなき大著であり、名著である。本文648ページ、註・書誌・人名索引を入れると688ページに及ぶ本書は厳格極まりない実証主義と飽くなき完全主義に貫ぬかれている。“緒言”で著者は本書が「マルタン・デュ・ガール、その人と作品と題してもよいような、小説家の生いたちからその死にいたるまでの生涯の記述と、その作品の分析である」と規定し、「このような総論的な研究書は、（中略）以前に幾つかのものが著されている。しかし、本書ほど詳細なものはまだ試られていなかったと言えるような気がする。」と自ら公言している。大した自負である。私もこの言葉は決して広言でも荒言でも高言でもないと考える。それ程ここには店村先生自身の発見と独創がある。

読者は、本書を数ページ読んだだけで、マルタン・デュ・ガール自身も知らなかった彼のルーツが店村さんによって明かされているのに驚く。

著者は数度の渡仏の間、古文書を調査し、遠い縁戚関係を訪ねて作家の家系を三百年前の十七世紀末まで遡って発掘している。

本書で、店村さんは又してもマルタン・デュ・ガールと同じことをやりたかったのである。青年時代、古文書学院に学んだこの作家は、そこで実地検証の重要さ、客観的事実の尊重、厳密な歴史考証の必要等、記録者に徹する精神を体得していた。研究対象に限りなき愛情を抱きながらも、常に一定の距離を保ち、自力であらん限りの客観的データを集め、実物大の姿を描き出す。店村さんがマルタン・デュ・ガール研究に適用したのもこの精神、この方法であった。

綿密な資料調査、周到な関連事象の考察を重ねながら著者はロジェ・マルタン・デュ・ガールその人の等身大の実像を鮮かに描き上げて行く。表面上は静かに平穩に流れて行ったかに見えるこの作家の内奥に展開されるドラマを店村さんは淡々と記述する。師と仰ぐトルストイの作品に迫ろうとする壮大なプランを抱きながら、あまりに多く収集しすぎた資料の重みに押しつぶされる創作上の困難、歴史を先取りしたつもりで立てたプロジェクトが現実の予期せざる急展開によって破棄され改変されざるを得なくなる苦渋、妻との不和や娘の反抗、さらには作家自身の病がもたらす懊悩と苦難を著者は見事に浮び上がらせてくれる。

マルタン・デュ・ガールの『チボー家の人々』が大河小説ならば、店村さんの『ロジェ・マルタン・デュ・ガール研究』は大河評論と呼ぶに相応しい。この研究は1983（昭和58）年、学位請求論文として京都大学に提出され、11月、店村先生に文学博士号が授与された。

文学研究のほかに、店村先生は音楽関係の仕事を数多く残されている。評論としては、

1974（昭和49）年 「評伝・ドビュッシー」 音楽現代 4巻6号

1975（昭和50）年 「チャイコフスキー・芸術と生涯」 音楽現代 5巻9号

翻訳としては、

- 1971 (昭和46) 年 ジャン・ヴィトルド「ベートーヴェン」(不滅の  
大作曲家シリーズ) 音楽の友社
- 同 年 アルフォンス・ド・ラマルチーヌ「湖畔の恋人」  
研秀社
- 同 年 マルチーヌ・カディユ「モーツァルト」(不滅の  
大作曲家シリーズ) 音楽の友社
- 同 年 ギー・エリスマン「チャイコフスキー」(不滅の  
大作曲家シリーズ) 音楽の友社
- 同 年 アントワーヌ・ゴレア「ドビュッシー」(不滅の  
大作曲家シリーズ) 音楽の友社
- 同 年 ジャン・マリー・グルニエ「ショパン」(不滅の  
大作曲家シリーズ) 音楽の友社
- 1972 (昭和47) 年 クロード・レイマン「バッハ」(不滅の大作曲家  
シリーズ) 音楽の友社
- 1975 (昭和50) 年 クロード・ロスタン「ヴェーベルン」(不滅の大  
作曲家シリーズ) 音楽の友社
- 同 年 ナニー・ブリッジマン「イタリヤ音楽史」クセジ  
ュ文庫 白水社
- 1977 (昭和52) 年 ピエール・ブーレーズ「意志と偶然」 法政大学  
出版局
- 1981 (昭和56) 年 ロジェ・テラール「シュッツ」(不滅の大作曲家  
シリーズ) 音楽の友社
- 1982 (昭和57) 年 アルフレッド・コルトー「ドビュッシー『前奏曲  
集第一巻』」 ムジカノーヴァ13巻第3号
- 同 年 アルフレッド・コルトー「ドビュッシー『前奏曲  
集第二巻』」 ムジカノーヴァ13巻第5号
- 同 年 アルフレッド・コルトー「『組曲』1」 ムジカ

- ノーヴァ13巻第6号
- 同 年 アルフレッド・コルトー「『組曲』2——ヘンデルとバッハ」 ムジカノーヴァ13巻第7号
- 同 年 アルフレッド・コルトー「『組曲』3——ドビュッシーとラヴェル」 ムジカノーヴァ13巻第8号
- 1983（昭和58）年 アルフレッド・コルトー「『変奏曲』1——その起こりとベートーヴェン『32の変奏曲』」 ムジカノーヴァ14巻第1号
- 同 年 アルフレッド・コルトー「『変奏曲』2——メンデルスゾーンとシューマン」 ムジカノーヴァ14巻第2号
- 1983（昭和58）年 アルフレッド・コルトー「『変奏曲』3——リストとブラームス」 ムジカノーヴァ14巻第3号
- 同 年 アルフレッド・コルトー「『変奏曲』4——デュカス、フォーレ、リスト、フランク」 ムジカノーヴァ14巻第4号
- 同 年 アルフレッド・コルトー「ピアノ演奏解釈」 ムジカノーヴァ社

これらの仕事を店村さんは趣味とか余技と称していたが、いずれも初訳であったから、音楽関係者に喜ばれた。

また、店村さんはこよなくフランス語を愛し、フランス語を教えるのが大好きな先生だったから、沢山のすぐれたフランス語テキストを残された。若い頃は、ヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』の有名な断章《La chute》（『失墜』）やトリスタン・ベルナールの楽しい喜劇《L'Anglais tel qu'on le parle》（『英語を話せばこんなもの』）等、筆者にも思い出の中級読本が多かったが、後年には『フランス語文法のかなめ』などの参考書や『ボンジュール・フランセ（文法編）』など初級テキストを多く手がけられた。

紙数も尽きようとしている。稿を終えるに当って、書き落としてならぬことがある。教育者店村先生はすぐれた人材をお育てになった。私にはこれこそ先生最大の業績ではなかったかと思える程だ。先生は一面、人懐っこい淋しがりやだった。自分の周辺に賑やかに人の居るのが好きだったし、面倒見も大変良かった。先生の研究室は人を歓迎する暖かい、開放的な部屋だったから、いつも同僚や知人、学生が入れ替わり立ち替わり出入りしていた。この中から、私の知る限りでも三人の専門家が育っている。いずれも現在、それぞれの大学でフランス語を教え、フランス文学、フランス哲学を講ずる学者だが、店村先生を終生の師と仰ぐ人たちである。三人とも店村先生の影響で人生の進路変更、方向転換を果たした人ばかりだ。店村先生がいま少し長く聖泉短大に居られたら、ここからも文学や音楽に転身する人が出たかも知れない。基礎ゼミでは熱心に音楽の話がされていたようだから。

工藤孝司氏は同志社大学法学部卒業後、同大文学部大学院でフランス哲学を専攻され、さる出版社に勤務されていたが、店村さんの初めての翻訳、マルタン・デュ・ガール『生成』の出版を手がけた縁で、店村先生の指導のもと、フランス語の研鑽を積み、G・ル・ロワ『パスカル』等の翻訳を出し、現在、滋賀文教短大助教授である。

佐藤正年氏は同志社大学文学部英文科在学中、店村先生の教えを受け、英文学からフランス文学に転向を決意し、広島大学文学部大学院でフランス文学を専攻され、現在、熊本商科大学助教授、一般教科長として大学改革に御活躍中である。エミール・ゾラに関するすぐれた論文を発表しておられる。

西村太一氏は同志社大学商学部在学中、基礎ゼミで店村先生の「西欧文学の主潮」を聞き、店村さんとフランス文学に魅了され、卒業後、大阪市立大学文学部に学士入学し、フランス文学を専攻された。氏は店村先生と同じくマルタン・デュ・ガールの研究を志されたから、最も足繁

く店村さんの研究室を訪ね、主著『ロジェ・マルタン・デュ・ガール研究』の完成にも多大の貢献をされた。同書の緒言に、「日々協力願ったマルタン・デュ・ガール研究家西村太一氏に心から御礼申し上げます。」という店村先生の言葉がある。西村氏は神戸芸術工科大学専任講師で、最も期待されるマルタン・デュ・ガール研究家である。

いま一人、忘れてはならない人がある。堀桂子さんの存在である。堀さんはノートルダム女子大の御卒業だが、主著の完成間近になった1982（昭和57）年頃から、いつも店村先生の研究室にあって、資料の整理、翻訳、タイプ等に当られ、先生の研究と主著の完成に大いに協力された。

なお、店村先生の主著には「畏友トゥルーズ大学の Claude Sicard 教授に捧ぐ」という献辞がある。そのシカール氏から西村氏宛に店村先生の死を悼む手紙が来ている。シカール氏は店村さん来訪時の思い出を夫人と共に懐かしみ、先生の学識、教養、お人柄を賛め称え、先生の奥様と御子息に心からのお悔みと同情を伝えてくれるよう依頼し、先生の思い出はマルタン・デュ・ガールの友人達の間で生き続けると述べている。

いま一人、世界的に著名なマルタン・デュ・ガール研究家 André Daspre 氏もニース大学マルタン・デュ・ガール研究国際センターの便箋を用い、店村先生のマルタン・デュ・ガール研究における功績を賞揚し、1981年国際学会の好発表を偲び、このように偉大な知性と博識を持ちながら素朴で飾り気のなかった人の逝去は痛恨の極みと結んでいる。

多くの人々に惜しまれながら店村新次先生は逝ってしまわれた。すぐそばに響いていたあの高らかな足音はもう聞こえない。この空白と寂寥は何をもってしても埋めようがない。残されたわれわれはこう呼びかけるのみ。

「店村先生、どうぞごゆっくりお休み下さい。」

1991年11月